

新発田城跡 第34地点（土橋門周辺）確認調査 発掘調査現地説明会 資料

令和7年6月28日(土)
新発田市教育委員会 文化行政課

I 調査の概要

調査主体 新発田市教育委員会（担当：文化行政課）

調査期間 令和7年6月2日～6月30日（予定）

調査目的 新発田城土橋門復元整備事業に伴う資料収集

2 調査地の概要と調査の目的

新発田城跡は、江戸時代に新発田藩を治めた大名である溝口氏の居城跡で、本丸・二ノ丸・三ノ丸から構成されます。今回の調査地（第34地点）は、新発田城本丸の南側、堀に挟まれた細長い帯状の区画（「帯郭」と呼称）です。この一角の南西部にはかつて土橋門があり、門の東西両側には土塁が残っています。現在は堀部安兵衛の銅像や物販施設「安兵衛茶屋」があり、新発田城址公園として皆様に親しまれています。

この本丸南側の郭「帯郭」の存在によって、土橋門から本丸表門までは狭く屈曲した道筋をたどることになり、一体的な構造として防御性を高めていたと推察できます。この郭の二ノ丸側の接点には土橋門が設置されていました。この土橋門周辺は残された古写真や絵図から施設の様子に分かること、土橋門両側の土塁が残っていること、新発田城の構造を考えるうえで重要な位置にあり、国重要文化財の表門・旧二の丸隅櫓、復元建物の辰巳櫓、市史跡の新発田城石垣等と一体的に価値を持つことなどから、市では土橋門の復元整備を検討し、令和7年3月に「新発田城土橋門復元整備基本計画」を策定しました。

この基本計画に基づき、土橋門復元の資料を得る目的で、土橋門の推定地及び周辺の土塁等について発掘調査（確認調査）を行いました。なお、令和6年6月に続き2度目の発掘調査です。



新発田城の範囲と調査箇所(1:25,000)



解体前の土橋門（右）と鉄炮櫓（左）
（明治5～7年頃撮影、市歴史図書館蔵）

3 土橋門及び土塁の概要

新発田城土橋門は、二ノ丸中ノ門から本丸表門へ至るルート上の門で、いわば正面側を固める施設と言えます。古写真や絵図から平屋で切妻造平入の薬医門形式、瓦葺きの建物と考えられます。門の手前には土橋があり、門の両脇には土塁を構えて土堀を巡らせていたことが分かります。

土橋門は、正保年間（1644～1647）に描かれた城絵図に描かれていることから、築城当初から配置されたことがわかります。享保10（1725）年の絵図には「土橋門」の記載があり、呼称されていたと知ることができます。また、門手前の堀には土橋（通路）が設けられていました。土橋の両側面は石垣造りで、平成25年の発掘調査でその姿が明らかになっています。

4 発掘調査速報

今回の発掘調査は、可能な限り遺跡を壊さないように限定的な範囲のみを掘削しました。その概要を速報します。

【土橋門の推定箇所】1・2・12・13 トレンチ
（※1・2 トレンチは令和6年度の調査）

古写真や絵図から土橋門の位置と推測される範囲を調査しました。現況の市道部分にあたり、両側と中央部は現代の電気や水道の埋設管の設置工事で既に失われています。現在の道路のアスファルト舗装と碎石の路盤直下で江戸時代に造成されたと考えられる整地層を検出しました。

一方、土橋門の礎石や柱穴、溝などの遺構は見つからず、門の詳細な位置を判断する資料は得られませんでした。このことから、検出した整地層の上面は江戸時代の地表ではなく、当時の地表面は道路造成などで削られたものと考えられます。

この整地層は砂やシルトなどを主体とする層や黒土を主体とする層などを交互に薄く積み重ねていました。これらの盛土の堆積状況から、堀や土橋の作られた南側から北側に向かって、数回の単位に分けて造成された様子がうかがえます。



「新発田城鳥観図①」（年不明、市歴史図書館蔵）



「新発田城中御間柄全図」（明治34年、市歴史図書館蔵）



13 トレンチ 土橋門推定箇所 整地層上面（北から）



2 トレンチ 土橋門推定箇所の断面（南西から）
※令和6年度調査

【東側の土塁】 5～7・11・15 トレンチ

土塁を横断する位置に試掘坑を設定しました。土塁北側斜面の5トレンチでは土塁の構造がわかる堆積を確認しました。整地層の上に暗褐色系の盛土で高まりを作り、その上に灰色系の砂やシルトを積み重ね高みを増し土塁の芯を形成しています。この砂やシルトは、自然に堆積した層に由来するものと考えられ、堀を掘削した際に発生した残土を用いた可能性があります。更にその上層に褐色系の混砂土などによる盛土を行って形作られたことがわかりました。

南側の7トレンチは堀側にあたり、調査の結果堀の埋土を確認しました。この堀は昭和30年前後に埋められたことが分かっており、埋土からもビニールや瓶などが出土しました。

土塁上面の6トレンチでは、平坦部の堀際付近の一部で石列が見つかりました。石列は10～20cmほどの円礫を主体とし、土塁の軸と平行に直線状に配されています。根の影響で上部の礫は動いていると考えられますが、下部は目地が揃っており良好な状態と見られます。土塁上には土塀が存



5トレンチ 東側土塁の土層断面（北西から）



7トレンチ 東側土塁・堀の土層断面（南西から）



試掘坑（トレンチ）の位置図（数字はトレンチ番号） S=1/800

在していたことが分かっており、その基礎と考えられます。この石列には一部 50 cm を超す大型の礫が見られます。同様の大型礫は土塁上の未掘削の場所でも頭をのぞかせており、堀の主柱の礎石である可能性について今後検討が必要です。

また、石列の上層からは瓦が多数出土しましたが、本瓦（赤瓦・黒瓦）、棧瓦が混在し、同時に屋根に葺かれたものではない可能性があります。

【西側の土塁】 8～10・14 トレンチ

8・9 トレンチで土塁を断ち割った結果、東側土塁と同様に中心部は自然堆積層の砂・シルトで盛土していたことがわかりました。また、堀側の端部では掘削可能な範囲では堀の埋土は確認されませんでした。土塁の平坦面上では石列等の遺構は確認されず、西側土塁よりも 0.8 m ほど低いことを考えると、既に削平され上面の遺構は失われたものと考えられます。

【東側の平坦部（郭）】 3・4 トレンチ

3・4 トレンチは、削平された土塁底部が地下に残存するかを確認するため調査しました。その結果、生垣部分の高まりは土塁の造成に認められない粘土で盛られているとわかりました。その下層はガラスやコンクリート片などを含む碎石で整地され、現代の工事で地下 0.6～1.1 m ほどまで失われているとわかりました。なお、その下は江戸時代の整地層が残ると見られます。

5 まとめ

調査の結果、残念ながら土橋門の詳細位置が把握できる資料は得られませんでした。既に失われたと考えられます。一方、土塁では、東側土塁で良好な遺存を確認しました。特に堀の基礎と考えられる石列を検出したことは大きな成果です。西側土塁は上面など削平された部分もあるものの、中心部では残存が確認できました。今後はデータを取りまとめ、土橋門の復元整備に活用する予定です。（※本内容は現時点の見解であり、今後の調査や検討の結果、変わる可能性があります。）



6 トレンチ 東側土塁上面の石列（西から）



6 トレンチ 東側土塁上層の瓦出土状況（北から）



8 トレンチ 西側土塁の土層断面（東から）



4 トレンチ 東側平坦部の土層断面（北から）